

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本論文の研究目的は、19世紀から20世紀後半までの社会学における社会運動論、「新しい社会運動」論の全体的な流れに対する、イタリア20世紀後半の社会学者アルベルト・メルッチ(1943-2001)の独自の貢献を、<社会運動に参加する個人の変容>という視点から明確にすることである。この、個人の変容に着目して社会運動の動向を見直すという研究目的自体に、本研究の意義がある。

加えて、独創性について、次の三点を指摘することができる。①社会運動に参加する個人の側の変容が、個のアイデンティティの確立を帰結するのではないか、という視点。②メルッチの主要4著作の30年に亘る論の推移のなかに、メルッチの問題意識の展開と深化を読み取ろうとする点。③メルッチ自身の三つの異なった問題関心、すなわち社会学的問題関心(これは客観的・経験主義的)、臨床心理士としてのメルッチの、個人の内面への眼差し(これは主観的・経験主義的)、晩期資本主義の高度情報化社会を時間論から読み解くという哲学的営為(これは形而上学的)、の三つの視点を総合的に融合しようとする点。これら三点も本研究の独創性に寄与している。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文の研究目的が重層的な独創性を有しているのと対照的に、研究方法は社会学の分析手法として手堅く妥当である。加えて思想研究の方法も加味されている。

本論文の研究方法は、論文の構成から明確に読み取ることができる。論文は二部、四章構成となっている。第一部が研究主題に関する史的回顧であり、第二部が研究主題そのものの解明である。第一部は19世紀から20世紀後半までの社会学における社会運動論の展開の把握に当てられる。第一章ではル・ボンからはじまって12人の社会学者の社会運動論を順次取りあげ、いずれも主要著作の枢要な箇所を的確に突いたうえで把握となっている。第二章ではメルッチに、とくに大きな影響を与えたといえるグラムシとトゥレーヌの二人を取りあげ、前者の「現代の君主」論、後者の「新しい社会運動」論について内在的な把握をしたうえで、メルッチが二人から何を学び、どこに批判の矢を向けたか、を明らかにしている。

第二部はメルッチの社会学思想の剔抉と今後の展開の可能的仮説の提示に当てられている。その分析手法としては、メルッチの短い生涯における主要4著作の注意深い読解と、メルッチの意図の再現とで成り立つ。ここには著者が徹底的にメルッチ本人の問題意識、苦悩の先に何を指したか、への共感の立場から思索し、著作に見られる重要な語句に注目しつつ、論を再構成したさまが伺える。思想研究の方法として妥当である。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

第一部で取りあげている12人の社会学者、グラムシ、トゥレーヌ、第二部で比較対象として分析されているボードリヤール、真木悠介について、いずれも主要著作を精緻に分析したうえで、第二部ではメルッチ本人の主要4著作が問題意識に沿って徹底的に分析されている。また、

邦文を中心とした副次的な文献の収集と分析も適切になされている。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか。

第一部において、19世紀から20世紀後半にかけての社会運動論に関する社会学の歴史を振り返るとどのような動向が指摘できるか、について極めて説得的な考察がなされたうえで、妥当な中間結論を得ている。それを承けて後半の本論第二部においては、一転してメルッチ自身の社会運動論と社会運動を通しての参加者個人の変容、アイデンティティの深化について、深い分析がなされたうえで、メルッチが夭折のため果たせなかった方向性を仮説として提示し、斬新な視点と把握の総合性という点で、かなりの説得性をもつ。この第二部で展開されたメルッチ論は、今後の内外のメルッチ研究に対して、一つの基準を示すことになるといえる。

また、第一部第二部を通して、論理展開、仮説の提示のほかに、学術論文としての文章の質が高く、その点も評価に値する。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか。

以上の評価から、本論文は博士論文として相応しい意義と成果を示しているといえる。その内容を改めていい直すと、本論文は、まず第一に、社会学の社会運動論の領域に属する学術論文として十分な意義と成果を示しており、ついで第二に、とりわけメルッチ研究に新機軸を開く学術論文として注目に値する意義と成果を有しており、第三に、社会学と臨床心理学と哲学とをまたぐ領域横断的な学術論文としての意義と成果を有するといえる。よって主査・副査6人は、本論文を「博士(学術)論文」として評価できる、と判定した。